様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７６０５２５

研究課題名（和文）１９世紀カタルーニャ建築思潮・史的文脈におけるガウディの建築論的言説に関する研究

研究課題名（英文）Study on architectural theory of Antoni Gaudi on 19th century's catalan thoughts

研究代表者
山村　健（Yamamura, Takeshi）

早稲田大学・理工学術院・その他

研究者番号：９０５５０３４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円、（間接経費）　　840,000円

研究成果の概要（和文）：スペイン、カタルーニャにおいて19-20世紀に活躍した建築家アントニ・ガウディ（1852-1926）が記した『日記装飾論』を以下二点から考察した。第一は建築論的考察であり、第二は建築史的文脈の視点からの考察である。その結果、ガウディの「生命の感覚」などの考えは、当時の美学者マヌエル・ミラから影響を受けていたことを突き止めた。さらには、「距離と視点」などの建築的概念は、当時の建築学科教授アリアス・ルジェンからの影響を受けていたことが指摘でき、その背景にはフランスの古典建築理論等が見透かせるため、その建築史的文脈の中にガウディの思想を位置づけようとした試みは新たなものであったと考えている。

研究成果の概要（英文）：This a study on architectural theory of Antoni Gaudi i Cornet, 1852 - 1926, a catalan Architect. Gaudi's architectural thoughts are described in his original hand-written notes which is called Manuscrito de Reus. To understand his architectural theory. I compared his several thoughts which is in Manuscrito de Reus with such as an aesthetician Manuel Mila y Fontanls, or an architect Elies Rogent. I fond that the concept of vida and sintesis, core ideas in Gaudi's architecture was influenced by Manuel Mila y Fontanals. Distance and Position was influenced by Elies Rogent.
I indentified the theories of aesthetician Manuel Mila y Fontanals, and architect Elies Rogent i Amat as being likely early influences on Gaudi's thinking. Finally I clarify the relationship among Antoni Gaudi's architectural theory and Catalan philosophical genealogy.

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学　建築史・意匠

キーワード：ガウディ　日記装飾論　美学　ミラ・フンタナルス　生命の感覚　総合　アリアス・ルジェン

１．研究開始当初の背景

（１）ガウディ論の趨勢

19-20 世紀初頭にかけてカタルーニャで活躍した建築家アントニ・ガウディ・イ・クルネットに関する研究は、世界中で毎年のように出版や展覧会などのかたちを通じて展開されている。特に 1960 年以降からの進展は大きく、近年はガウディが設計した建築の形態原理を 3D-CAD 等を通じて解明しようとする研究が多くみられる。

（２）本研究の位置づけ

しかし、その一方で、ガウディ自身の建築に対する思考を理解しようとした研究は皆無である。その趨勢において、本研究はガウディが自ら記した『日記装飾論』を元にしながら、ガウディと同時代に生きた思想家らとの関連の中で彼の建築論的思想を理解しようとする点において特異であると考えている。

２．研究の目的

19-20 世紀初頭にかけてカタルーニャで活躍した建築家アントニ・ガウディ・イ・クルネットの建築論的言説を解明することにある。特に、同時代的に活躍した美学者や建築家らの言説を参考にしながら、ガウディの思想を建築論的に理解したいと考えている。

３．研究の方法

本研究は以下の三点の主題に沿って行われている。その基本となる文献に関しては、スペイン・バルセロナ在カタルーニャ州立図書館、バルセロナ建築大学ガウディ講座、サン・ジョルジュ・アカデミー、フランス・パリ在、フランス国会図書館、ポンピドゥー・センター・カンディンスキー図書館、建築博物館図書館他に赴いて収集し、複写等したものが中心となっている。

（１）『日記装飾論』の精読

ガウディの『日記装飾論』に散見される建築論的概念（建築理論、建築史学、美学などがそれにあたる）を体系的に整理し、精読する。

（２）、19 世紀カタルーニャ諸思想等の考察

19 世紀カタルーニャ建築思潮等を考察する。具体的には、Manuel Milà y Fontanals 著、『Pincipios de estética ó de teoria de lo bello』(1857)、Pau Milà y Fontanals 著、『Estética infantil』(1903)、Elies Rogent 著『Elies Rogent i Amat memòries viatges i lliçons』が挙げられる。これらを全訳し読解することを通じて、19 世紀カタルーニャ建築思潮等を概括する。

（３）、『日記装飾論』と 19 世紀カタルーニャ建築思潮等との比較

（２）で得られた 19 世紀カタルーニャ建築思潮等と『日記装飾論』を比較考察し、ガウディの言説を建築論的に考察する。

４．研究成果

本研究の期間は平成 24-25 年度における二年間であった。本研究計画や研究方法は、本助成金申請時のそれらに即して行うことができたと考えている。

上記に述べた研究の方法に即して、研究の成果を以下に述べたいと思う。

（１）『日記装飾論』の建築的概念の体系化

ガウディが記した『日記装飾論』はジョージ・コリンズ（George Collins,1917-1993）が、「アレンジにおいて反復的」と指摘したように、様々な主題が織り成されてガウディの建築に対する考え方が、日記調に綴られているものである。その中で、「生命の感覚」や「総合」というキーワードが時折散見され、それらの制作に関して重要であると考えられる言葉を抜き取りながら精読した。

（２）19 世紀カタルーニャ諸思想等の考察

本研究では、19 世紀カタルーニャ諸思想等の考察として、以下の三点の文献を主軸にして行った。一点目は、美学者マヌエル・ミラ・イ・フンタナルス著『美の原理、或いは美の理論』（1857 年）である [1)]。本研究では、まず同文献の全訳を行った。マヌエル・ミラ（Manuel Milà y Fontanals,1818-1884）はカタルーニャで最初の美学書を記した人物である。19 世紀後半には、カタルーニャにおいて勃興した芸術運動ラナシャンサの発起人であった。マヌエル・ミラはカタルーニャに多くの近代ヨーロッパ思想を導入することに力をいれると同時に、カタルーニャ文化再考を強く世に訴えていた。彼の著作は、カタルーニャ建築についての論考から美学まで広範な内容なものが扱われており、これらの著作からガウディが影響を受けたという背景を元にしている [2)]。その一例として、マヌエル・ミラの「直観的総合的生命観」の概念とガウディの「生命の感覚」との関連を比較考察した一例を次に記す。

マヌエル・ミラは、同書において想像力に関して以下のように述べる。「人間は、およそ自然界で見いださないものを、いかにして想像することができるのか。また、自然界に現前する美しい諸対象を、我々はどうして理想化できるのだろうか」と述べる。

人間には、「知覚、感覚、感情を記憶するだけではなく、どうにかしてそれらを再生し、再現する力」があると述べる。その力を想像力と呼ぶのであるが、その多くは、建築や彫刻、絵画に代表されるように「視覚的イメージ」に頼るという。しかし、痛み、喜び、音を再現することもしばしば在り、その一例として森を再現する際の想像力について、以下のように述べる。「森とは、林立する木々の形のみを単純に連想させるのではなく、枝と枝によるざわめき、清涼な空気、身体的な安

らぎ、そして私たちを落ち着かせる精神的平穏をも感じさせる」ものである。確かに前半部は視覚的なイメージを伴うものであるが、後半部は感性的な再現まで含まれており、想像力には視覚的イメージ以上の再現があることが分かる。マヌエル・ミラはこのことを想像力と呼ぶ。「想像力をそのような再現の最高度の総合 mayor suma と生命 mayor viveza と呼ばなければならない。しかし、これらは美学的な想像力の操作だけではなく、理想化しながら構成していく力」にも作用すると述べる。さらに注目すべきことは、マヌエル・ミラは、想像力には「理想化 idealizar」する力が伴ったものであることを指摘する。単に想像力によって再現されるのではなく、最高度の総合と生命によって昇華されるべき美があるとする論究方法には、彼の美学の本質的な「直観的総合的生命観」が確認される。

ガウディは、対象の感じ方を以下のように記す。「私たちは、ある対象の思い出を直観的に詩的なものにし、それをさらに美しいものにつくりあげる。このことは否定することができない。私たちがもしその対象から心楽しい印象を受けるならば、思い出は私たちにさらに数倍も心楽しい印象を与えるであろう。それがもし、恐ろしい印象を私たちに与えるものであれば、思い出すだけでもそれは私たちを脅えさせるだろう。それゆえ、これらの性質を楽しむためには、その対象をよく知ることが必要であり、その場合にも思い出はこの対象を一層美しくするであろう」(『日記装飾論』66 頁。以下、『日記装飾論』を○○頁、それ以外の文献を p.○○の形式で表記する)。ガウディはさらに対象を注意深く観察することの重要性について記す。「詩的思い出を持とうとすれば、対象についてあらかじめ知っておく必要がある。つまり、その表現を効果的にするため、表現したいと望むものをよく知っておくことが必要である」(原本 66 頁)。それは植物学を例にした対象の観察に顕著である。「植物研究と“植物学”は装飾上きわめて有利な条件を持っている平凡な植物をつくりだす。それらは幾何学コンビネーションによって装飾に容易に応用され、決定されるので、それらの植物が成長する田園のように、前もって形態を輪郭づけよう。(中略)しかし、ある種の厳格な因習主義によって、実際には枝葉の茂った、涼しげで、潑溂とした植物を生気のない植物としてしまう」(原本 26 頁)と記し、ここからガウディが植物研究と「植物学」研究を差別化していることが理解できる。それは、まさに前者のような「生気のない植物」としての接し方ではなく、対象から生命への感覚を感得する姿勢をもつべきであることを強調していると理解できる。また、マヌエル・ミラも同様に植物学の研究について、「植物学の研究では植物の美しさによる詩人的高揚はありえない」(p.8)と記し、これは植物学の研究を前述した抽象的分析的科学と捉え、詩人的高揚を直観的総合的生命観の視点としていることが確認される。　以上のことから、マヌエル・ミラの直観的総合的生命観の視点とガウディの「対象から心楽しい印象」をうけようとする生命の感覚を感得しようとする姿勢とが同義であると考える。

以上がマヌエル・ミラの「直観的総合的生命観」の概念とガウディの生命の感覚との関連を比較考察した例である。同様にして、両者の諸概念を比較考察したことによって、若年期にガウディがマヌエル・ミラから影響を受けていた背景を確認することができたと考えている。

二点目は、パウ・ミラ・イ・フンタナルス著『直観の美学』(1904)との考察について述べる[3)]。

パウ・ミラ(Pau Milà y Fontanals, 1810-1883)はマヌエル・ミラの兄であり画家である。彼はバルセロナにある美術アカデミーで教鞭をとっていた。退職後も市内の各所で積極的に講義を行うなどして、精力的に活動していた美学者である。彼は、絵画作品を通じてロマン主義をカタルーニャに啓蒙した美学者であった。ゆえに、彼自身が講義のために描いた図版なども同アカデミーに保管されており、彼の美学を知る貴重な資料となっている。同書も、同アカデミーに保管されていたものを、論者が複写をして研究の資料としたものである。これは、パウ・ミラが記した唯一の書物である。ゆえに、彼の思想を知る上では非常に貴重なものとして位置づけることができる。マヌエル・ミラのような論理的な章構成ではなく、芸術とはなにか、建築、住居、美などのテーマに対して、詩的に綴られた物である。本報告書では、パウ・ミラとガウディの接点を創造の概念を一例として以下に述べる。

パウ・ミラは創造について以下のように述べている。「感情と空想は、詩作の糧である。心がなければ、想像力もない。芸術家は創造しない。」「創造の炎は炭の炎ではない。」(p.18)これに対し、ガウディは晩年の言葉の中で以下のことを述べる。「創造は人間を通じて絶え間なく働きかける。しかし、人間は創造しない。発見する。新しい作品のための支えとして自然の法則を探求する人々は創造主と共に制作する。模倣する人々は創造主と共には制作しない。それゆえ、創造とは起源に帰ることである。」この両者に共通する点は、芸術家は創造という行為は行わないと指摘している点である。ガウディは「発見」することであり、それには生き生きとした生命観が必要であると述べている。また、パウ・ミラも同様に、創造の糧は、「炭」ではなく、作家の精神を燃やすものであると述べる。それはガウディの述べる日々の生き生きとした働きや観察によって、自然の法則を発見するという創作態度と通じるものである。ここに論者は、創造においてガウディの思想

の背景にパウ・ミラの思想を見透かすのである。

三点目はアリアス・ルジェン著『建築理論』との考察について述べる。

アリアス・ルジェン(Elies Rogent i Amat, 1821-1897)は、学生時代に甥の画家クラウディ・ロレンツァーレ（Claudi Lorenzare, 1816 - 1889 ）を通じて、ミラ兄弟と交流を持ち始め、彼らと芸術家グループを結成し、「ミラ兄弟派（El grup dels Milà)」と呼ばれた。そこでは、パウ・ミラが中心となってバルセロナの中世文化について議論し、パウ・ミラを介してローマの「ナザレ派」との交流があったことが知られている。1850 年から 1871 年まで、建築工匠学校にて教鞭をとり、ガウディは彼の「建築論・建築史」の講義を受講することになる。その講義録が現在も残っており、『アリアス・ルジェン・イ・アマト旅行記と書簡』(1990) として出版されており、本研究ではそれを底本として全訳した [4]。

ガウディはギリシア建築が、距離と視点の関係、幾何学的構成、そしてプロポーションなどの造形原理において秀でていると述べている。「遠方から眺望されるギリシアの神殿においては、デザインの構成は明瞭であるがゆえに切り詰められた的確な形態である。建築のエレメントは複雑ではなく簡潔であり、明暗法なしに輪郭はくっきりとしている。距離が真に考慮されており、生命ある輝きは強い色彩をそれ自身の中に内包していた」（原本 57-58 頁）と述べ、ルジェンも「ギリシアでは何よりも先に理論的で理知的である作品が作られた（形態の調和的な組み合わせや支柱の大きさや位置が、建物に性格を与える)。建設上の問題から柱もその距離や視点、配置によって更新されてきた」(p.219) と第四十一講で述べている。

同様の考察をルジェンの全ての講義内容と照合して試みた。結果的には、ミラ兄弟のような生命の感覚や創造などといった創作態度に深く関係する概念というよりは、建築的な概念のいくつかにおいて共通性を発見することができた。

しかし、ここで論者が強調したいのは、ミラ兄弟とルジェンの関係から浮上するガウディの位置づけである。ルジェン研究者のバルセロナ建築大学教授ペーレ・エレウのルジェンの思想に関する考察を参照する。彼は、ルジェンの思想は、マヌエル・ミラの美学の系譜に入ると指摘していることを述べており、また、ルジェンはパウ・ミラを中心とする「ミラ兄弟派」であったと指摘している。このことに依拠して、ルジェンの評価を考えるならば、ルジェンの思想は、ミラ兄弟の系譜の上に位置づけられるといえよう。つまり、ガウディとルジェンとの思想を本研究において比較したわけであるが、そのルジェンも実は、ミラ兄弟の系譜にいることから、ルジェンもガウディもミラ兄弟の系譜にいるということが導かれよう。しかし、パウ・ミラと同様にルジェンは、ガウディの立場から考察すれば、教育者側の人間になり、カタルーニャにおいて思想を形成する立場にある人物であった。そして、それぞれの人物の思想を俯瞰すると、本研究の範疇で述べれば、マヌエルを主幹とした美学的系譜の中で、「ナザレ」派に傾倒しながら直観的把握の姿勢を貫いたパウと、マヌエルの美学を建築論的に展開させたルジェンがいる思想的系譜の構図が浮揚するのである。そこに、本研究の対象であるガウディの建築論的言説を対置させるならば、各々個別に考察してきた内容から、ガウディの建築論的言説は、カタルーニャで普及していた思想的系譜の中に位置づけられることを明示するのである。

これにより、ガウディの建築論的言説を 19 世紀カタルーニャ建築思潮等の系譜の中に位置づけることができたと考えている。

さらに、本研究を元にした今後の研究の展開と展望を述べたい。本研究でのマヌエル・ミラとの比較において、ガウディの「生命への感覚」などの概念を中心に考察した。そのガウディの建築の当時の評価は、バルセロナにおいては芳しいものとはいえないものであったが、フランスでは高評価であったことを示す論考がある。それは、マリウス・アリィ・ルブロンによる「ガウディと地中海建築」である [5]。

ガウディは生涯展覧会などの公の場での作品の説明をすることはしなかったが、1910 年にパリで行われたボザール主催の展覧会だけは別である。同展覧会は、ガウディのパトロンであったグエル伯爵が仲介して実現した。主催者は当時ボザールの教授であったアナトール・ドゥ・ボード(Anatole de Baudot, 1834-1915)であり、彼はヴィオレ・ル・デュック (Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879)の弟子であった。ガウディもヴィオレ・ル・デュックに影響を受けていたことが『日記装飾論』にも記されており、ボードがガウディの展示を快諾したことも推察される。その展覧会に、ガウディ自身は赴くことはなかったが、フランスの批評家達がその展覧会をもとにしたガウディの建築に対して一定の評価をしている。その一つが、「ガウディと地中海建築」である。以下にその論考におけるサグラダ・ファミリア聖堂に関する記述の一部を抜粋する [2]。

「文字に隠された自然の精神や、線に隠された生命観を観よ。交差アーチに刻むのではなく、純粋な幾何学造形から木々の葉脈にまで、ガウディは自然に生命を与えた。ボールトは鼓動している。それはまるで洞窟の内壁のようである。自然の諸形象や動物達が自由に解放されている。彼らを捜し回ってはならない。メイダヨンに囲まれて隠れているのだから。栄光のキリスト誕生の近くで息を潜めている。鴨と七面鳥はフリーズを所狭しと走り回

っている。ペリカンは、洞窟の中腹で翼を広げほほえんでいる。蛇、トカゲ、カタツムリ、建物の片隅で穏やかに太陽を浴びている。植物と動物が躍動して栄光を祝福する中で、キリストが誕生する。彼は、自らの行いを宣言し、あらゆる地上の生命あるものから祝福されている。調和あるものである。

ガウディの天才、それは自然によって建築に生命を与えたことであろう。彼は諸尖塔、柱、回廊などの建築的構成要素に抽象的な輪郭によって不滅性を与えるのではなく、鼓動する生きた形態によって生命を蘇生させるかのようだ。（中略）この芸術は、カトリシズムの自然な開花である。それは地中海の泉である偉大なるクレタの湖からの開花を意味する。（中略）ガウディは、中世からルネサンスまでのカトリックの伝統を継承したのである。豊かさへの謙虚さ、異教的精神、枝を刈り取ることのない寛大さ、寛容さ、異教性精神を統合した精神と、自然の崇拝を呼び覚ましたメディチ以来の汎神論的カトリシズムである。（中略）ガウディはこの聖堂を、地中海の花々と動物で包み込み、彼の計り知れない生命観の内に、祈祷の賛美歌へと昇華させたのである。（中略）ガウディはこのモニュメントを彫刻として取り扱うことによって、ゴシックを前進させた。それによって、むしろ色彩を本来的に使用したギリシア様式の建築的彫刻に近づいたのである。要するに、ガウディの建築はゴシックからの解放であった。結果として、ガウディの建築は、ゴシックからの解放であると同時に、地中海の場所性を背景とした、近代的感性を伴ったカトリシズムの精神性と自然とが結実されたものである。」（pp.73-76）

ガウディの建築に対する評価は 20 世紀後半まで待たなければならない、とするのがこれまでのガウディ研究における一般的な知見であった。しかし、本研究を端緒とした「生命の感覚」に関する更なる考察や、マリウス・アリィ・ルブロンの論考が示唆しているようなガウディの思想の同時代的な評価に関して穿鑿を進めていくことで、建築史的文脈の中の新たなガウディの位置づけを浮上させることが、今後の研究課題の一つになりえると考えている。

1. Manuel Milà y Fontanals, *Pincipios de estética ó de teoria de lo bello* 1858,Barcelona,
2.「建築家アントニ・ガウディと美学者ミラ・イ・フンタナルス兄弟の関係について」山村健，入江正之、日本建築学会計画系論文集 75(651), 1287-1292, 2010.05
3. Pau Milà y Fontanals, *Estética infantile*, Barcelona, Tipografía Moderna, 1904.
4. Hereu i Payet, Pere, *Elies Rogent i Amat memòries viatges i lliçons*, Col-legi D'Aparelladors i arquitectes tècnics de Barcelona, Barcelona, 1990
5. Marius-Ary Leblond, *Gaudi et l'Architecture Méditerranéenne*, L'Art et les Artistes, Paris, XI,1910, pp.69-76

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

日本建築学会大会

①「美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について（8）　—アントニ・ガウディ・イ・クルネット研究—」山村健、入江正之、日本建築学会大会（近畿）学術講演会、神戸大学 9 月 13 日、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2, 2014

②「美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について（7）　—アントニ・ガウディ・イ・クルネット研究—」山村健、入江正之、日本建築学会大会（北海道）学術講演会、北海道大学 8 月 31 日、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、p.519. 2013、

６．研究組織

(1)研究代表者

山村健（YAMAMURA, Takeshi）
早稲田大学・理工学術院・招聘研究員
研究者番号：90550343